

論文の要旨

論文題目 日本と韓国のことわざの比較研究
——ことわざスペクトルと比較ことわざ学——
氏名 鄭 芝淑
学位 博士（文学）
授与年月日 平成19年3月23日

本研究は2つの目的を持っている。第1の目的は、日本と韓国のことわざの諸相を比較対照しその類似点と相違点を明らかにすることである。その点では、これまでに数多くなされてきた日韓ことわざ比較の試みの延長線上に位置するものである。しかし、本研究は従来の比較の試みが共通に抱えていた方法論的問題点の認識を出発点としている。従来の比較ことわざ研究が「比較ことわざ学」の確立に至らなかったのは、比較の対象とすることわざ群をどのように画定するかという方法論的問題に対してほとんど関心を払ってこなかったためであることを指摘する。その上で、異なる文化のことわざを総体的に比較するためにどのような方法論的条件が満たされなければならないかを考察し、「比較ことわざ学」を学術的研究分野として確立するための足がかりを得ることが、本研究の第2の目的であり中心的課題である。各章の概要は以下の通りである。

第1章では、本研究の目的と方法を論じ、比較ことわざ研究に関するいくつかの基本的事項について述べる。ことわざ研究における比較ことわざ研究の位置付けを行ない、それが「比較ことわざ学」という学術研究分野として成立するためには、何よりも方法論を確立しなければならないことを論じる。日常的に行なわれる比較行為と学術研究における比較作業との違いを明らかにし、学術研究としての比較ことわざ研究が満たさなければならない条件を考察する。特に、方法論の出発点である比較対象ことわざ群を画定するための方法の確立が最重要課題であることを論じる。また、ことわざの定義の問題に関して、本研究ではそれを議論の出発点とはしないこと、ことわざの定義は文化依存的な面があるため分析の結果として得られるものであることを論じる。

第2章では、本研究の議論の中核となる「ことわざスペクトル」(Paremiological Spectrum)の概念を導入し、比較ことわざ研究におけるその意義について論じる。それぞれの文化のことわざの総体は互いに同等な資格を持つことわざの単純な集合ではなく、使用頻度、認知度、定着度などによって総合的に規定される「重み」の異なることわざの集合であり、非常に「重み」のある中核的なことわざから「重み」のほとんどな

い周辺的なことわざに至るまで、いわば同心円スペクトル状に分布することわざの集合体であるとみなすべきことを論じ、これを「ことわざスペクトル」と名付ける。そして、異なる文化のことわざスペクトルの中心から同じ大きさの部分を切り取って比較ことわざ研究の対象とすることわざ群を画定すれば、比較結果の信頼性が保証されることを論証する。

しかし、ことわざスペクトルは切れ目のない連続的実体であるから、比較ことわざ群の切り取りができるものに変換しなければならない。アナログの実体であることわざスペクトルの写しとして、切り取り可能なようにデジタル化したリストを「ことわざスペクトルリスト」(Paremiological Spectral List)、略して「PS リスト」(PS-List)と呼ぶ。PS リストを作成する方法として、想起度調査による方法、認知度調査による方法、使用頻度調査による方法、ことわざ辞典調査による方法を検討し、比較ことわざ研究の対象ことわざ群の画定に適した PS リストを作成するには、ことわざ辞典調査による方法が最も適切であることを論証する。ことわざ辞典調査による方法とは、あることわざを収録している辞典の冊数が多いほどそのことわざの「重み」が大きいとみなすものである。過去 20 年ほどの間に日本と韓国で出版された 30 冊前後のことわざ辞典・ことわざ集を資料として日本と韓国のことわざの PS リストを作成したが、その作成手順と結果の概要を述べる。

第 3 章では、日本と韓国のことわざを比較するために行った 3 種類のアンケート調査の結果を報告する。第 1 の調査「10 分間想起式アンケート調査」は、10 分間で思いつく限りのことわざを書き出してもらうという形式の調査である。これは 2 つの目的を持って行なわれたものである。1 つは、PS リストを作成する方法として想起度調査が有効であるかどうかを検討するためであった。それについては第 2 章で有効ではないことを論証する。もう 1 つの目的は、日本と韓国におけることわざの総体的認知度の調査である。これに関しても、一般に高齢層の方が若年齢層よりもことわざをよく知っていると考えられているにもかかわらず高校生が最も想起度数が高いなど、想起式調査が認知度を知るための調査としては不相当であることを強く示唆する結果が出たことを報告する。また、この調査と合わせて行った、ことわざの使用状況に関するいくつかの設問に対する回答結果も報告する。特に、ことわざに接する機会として回答された「いろはカルタ」(日本)と「コンピュータ」(韓国)に注目して想起式調査の結果との関係を考察する。第 2 の調査「認知度調査」は、PS リストを利用することによって、ことわざに関する総体的認知度を簡便に調査できることを示そうとしたものである。PS リストから同じ基準によって選ばれた日本と韓国のことわざそれぞれ 25 件を調査項目として、後半部補充式テストの形で行なった。調査様式的设计に不備があったものの、概ね予想された結果が得られたことにより、PS リストが認知度を簡便に調査する方法として有効であることを論じる。ただし、認知度調査以降 PS リストには異形の処理などの改訂がなされているため、最新版の PS リスト Ver.2006 に照らして調査結果を再検討し

たところ、分析結果にかなりの変化が生じた。しかし、PS リストを認知度調査に応用することの妥当性には変わりがないことを論じる。第3の調査「共感度調査」は、日本と韓国で共通する意味内容のことわざを25対選び、その内容に共感するかしないかを調査したものである。この調査はことわざスペクトルおよびPS リストとは無関係に行われたものである。いくつかのことわざ対に関して日韓差や世代差が見られ、その理由を考察する。

第4章では、PS リストを用いて画定されたことわざ群を対象として、日本と韓国のことわざの諸特徴を数量的に比較する。ことわざの特徴は従来の比較ことわざ研究において最も多く取り上げられてきた課題であるが、比較対象とすることわざ群の画定が客観的になされていなかったために比較分析結果に信頼性と説得力が欠けていると指摘し、PS リストに基づきことわざ群を画定することによって、この方法論的問題点を解決できることを論証する。比較を試みる特徴としては比較的数量化が容易なものを選ぶこととし、語彙的特徴に関しては身体語彙、動物語彙、数字語彙を、形式的特徴に関しては異形の分布、古風な表現、並列形式、体言止め、文種（平叙文、疑問文、命令文・禁止文、条件文）、パタン化などを、その他の特徴に関しては助詞の特殊用法、由来・起源を取り上げる。

第5章では、ロシアのことわざ学者 G. L. Permiakov によって提唱され、現在 Wolfgang Mieder らの研究によってことわざ学の中心的課題の1つとなっている「ことわざミニマム」の概念と本研究が導入したことわざスペクトルの概念との関係を考察する。Anna Tóthné Litovkina, Kimberly J. Lau, Raymond Doctor らによることわざミニマム選定の試みおよび筆者自身の試みを比較検討し、これまでの研究では選定手順の規格化・標準化が図られてこなかったことを指摘する。さらに、ことわざミニマムはことわざスペクトルの中核部分として位置付けられるものであることを論じ、その選定手順の一部としてPS リストを利用することが望ましいことを論証する。また、ことわざミニマムが「文化リテラシー」の尺度の一つとして位置づけられ、言語教育、特に外国語教育において重要な役割を果たすと主張されていることから、韓国語教育においてことわざが教育素材としてどのように利用されているかについて、種々の韓国語教材と「韓国語能力試験」を資料として、その実態を調査する。その結果の考察に基づき、韓国語教育の素材としてことわざを用いることの意義を確かなものにするためには、ことわざミニマムのような概念を導入する必要があることを論じ、それにはPS リストの利用が有効であることを説く。

第6章「結び」においては、本研究の内容をまとめ、ことわざスペクトルの概念およびPS リストに基づく比較ことわざ学と従来の比較ことわざ研究との関係を再検討すると共に、今後の課題を考察する。本研究が目指す比較ことわざ学は、従来の研究成果をすべて否定するものではなく、むしろ、多くの有意義な成果に対してはその信頼性を高める道を開くことになると主張する。また、今後に残された最も重要な課題として、PS

リストの標準化の問題を論じる。日本と韓国のことわざに関しては、PS リストを作成するのに十分な数のことわざ辞典が出版されているが、これはむしろ例外的な状況であり、どの文化のことわざにも同じ方法で PS リストが作成できるわけではない。比較ことわざ学がすべての文化のことわざを対象とすることができるように、どの文化のことわざに対しても同じ手順で作成される標準 PS リストが必要となる。ことわざ辞典調査の利点を活かしながら標準 PS リストを作成する方法の構想を示す。

最後に、予定以上の時間を要した本研究の成果である PS リスト Ver.2006（日本版・韓国版）の一部を巻末に付録として掲げた。これを公表し他のことわざ研究者と共有することによって比較ことわざ学の内容に充実に貢献することが、本研究の最大の目的であることを付け加えたい。